

『朝鮮と日本に生きる』

2016年03月28日

金時鐘氏の『朝鮮と日本に生きる — 濟州島から猪飼野へ』を重い気持ちで読んだ。人は皆、時代に翻弄させられながら生きている。金氏は日韓併合と朝鮮動乱の時代の闇を背負い、重く辛い人生を強いられた。その自伝的回想を詩人らしい美しい文章で著している。韓国の濟州島で少年時代を過ごし、日本の軍国主義に心酔した子どもであった。4月29日の「天長節」や2月11日の「紀元節」を誕生日とする友だちを羨ましく思った。金氏は12月8日が誕生日で、この日が真珠湾攻撃のあった「大詔奉戴日」となったことを誇りに思うほどの軍国少年であった。また、日本の情緒的な詩歌に憧れ、親しみ、それが文学的才能を育んだこともあったようだ。1945年8月15日に日本は敗戦となり、朝鮮は解放された。周りは「万歳（マンセイ）、万歳」と歓喜したが、金少年は消え入りそうな絶望感を味わったという。

しかし解放後、日本の植民地下の圧政にあったことを知り、政治に目覚めた青年に成長していく。米ソの対立が激化し、朝鮮支配を巡って争っていた。金氏は濟州島で共産党に入党し、祖国の統一と独立を目指す運動に関わっていく。北は、金日成が朝鮮労働党政権を樹立し、南は、親米、反共産主義の李承晩政権が生まれる。そして、南北の分断は決定的になっていく。濟州島では、南北統一と自主独立国家の樹立を訴えるデモが起こった。1947年3月1日のデモ隊に対し警察が発砲し、6名が殺害された。金氏は、警察の発砲は明らかに米軍の指揮下でのことであったと書いている。米国に後押しされた李政権は強力な「反共主義政策」を断行した。濟州島は「アカの島」と言われ、南朝鮮の警察、軍、右翼団体が来島し、厳しい粛清が行われた。金氏の友人たちが拷問で殺され、射殺されている。この事件は「濟州島四・三事件」と言われているが、島民の5人に1人にあたる6万人が虐殺され、70%の村々が焼き尽くされた。金氏は連絡員をし、幾多の危機を乗り越え、生き延びることができた。そして、父親に送られ、小さな舟に乗って日本に逃れて来る。濟州島から逃亡したことが、金氏の心の疼きになっている。濟州島は流刑地・左遷地だったことなどから、本土からは差別され、貧しかったらしい。日韓併合後、朝鮮から日本に来た20万人ほどの大半が濟州島出身者であった。日本の敗戦後、その3分の2くらいが帰国したが、四・三事件発生後、再び日本への避難、密入国が増えたという。

私は、こんな話を聞いたことがある。韓国から日本に密入国した時、海の上でロープがスクリューに絡まり動かなくなった。冬の冷たい海に飛び込み、ロープを切って、ようやく日本に辿り着いたと。彼らは命がけだったのである。また、私は在日の友人のお父さんの葬儀をしたことがある。北朝鮮系の総連と韓国系の民団の人が来て、自分たちが仕切ると言い争いになった。朝鮮半島の南北分断は、在日の人々にも深い分裂をもたらしている現実を知った。また「朝鮮新報」を読んでくれと頼まれ、しばらく購読した。しかし毎回、金日成の大きな顔写真が載り、ワンパターンの記事に辟易し、止めてしまった。

来日した金氏は大阪市生田区のコリアンタウンに住みつくが、極貧の生活であった。良い友人、知人を得て、在留特別許可証を受け、在日朝鮮人の政治や文化活動で活躍される。幾つもの文学賞も獲っている。濟州島の韓国籍を取得し、故郷には49年ぶりに帰って、親戚に優しく迎えられたという。暗い歴史に翻弄されながらも、南北統一を求め、在日の意味を受け止め、その使命に生きている姿は美しいと敬服する。

朝鮮半島の南北分断は植民地支配をした日本に責任があることを知るべきである。